

びっと・いん



★夜のきらめきは、カクテルの中一粒の宝石から北野の一角にあるこのお店は、地元「神戸っ子」達にはもうすっかりお馴染みのカクテルバー。他と一味違うのがカクテルに宝石を入れることで、誕生石、あるいは好きな石、(パールアメジスト、トパーズなどが中心)を入れるオリジナルカクテル3千円。お奨めは、「セレジェネーミングカクテル」。男女を問わず、カクテルの味をお客様自身の好

みにあわせて、つくってみたい、カルテに登録してもらうシステムになっている。世界にひとつしかないあなただけのカクテルが楽しめる。その他におまかせカクテルコースが好評で、ジュエリーカクテル、食前酒、デザートカクテルにオードブルがついて6千円というからお得。カクテルを飲んだあとのジュエリーは5千円だせば18金を使ってリングなどに加工してもらえる。

また、毎月の月末には定例パーティーに男女20名を招待。ジュエリーオークション、キヤッシュビンゴなど楽しい催しがいっぱい。詳しくはお店まで。リッチに飲んで、おしゃれにジュエリーで演出して下さいと店長の松本さんの言葉。



■神戸市中央区北野町3-12
15BKプラザ1F
PM6/AM2(日)はAM12
まで 営業 0048 無休

★SAND BEIGE

開店一周年を迎える
須磨海浜水族園から国道2号線を隔てた向い側の、カフェレストランSAND BEIGEが開店一周年を迎えた。

ターコイズグリーンで統一されたポップな店内には若いカップルやファミリーの姿が絶えず、ママの峯菜子さんの姿もすっかり板についた。明るい人柄を慕って訪れる常連客も開店一周年を祝ってくれたという。



メニューの全てを手づくりで押し通しているの、味は保証つき。ランチセツトメニューが八八〇円からと、お値段も手頃。TAK E OUTもできるブルーシールのアイスクリームも夏にはうれしい。

■神戸市須磨区若宮町3-14
AM8/PM9
営業 735-1991 夏期無休

★カフェロワイヤルの炎から

ロマンが生まれる都会の喧噪を避け、いつもしっとりと落ちついていいる店内。クリムトの絵、パロックの調子が流れる中に一歩足を踏みいれるとそこは別世界。

コーヒーカップにも物語があり、ピカソから星の王子様まで様々。店内には、初夏は水仙、秋には彼岸花



と、四季折々の花が生けてあり、忘れかけた優しい心をとりとめてくれる。

カフェロワイヤルの炎のゆらめく中、あなただけの私だけの夢がさめない。オリジナルブレンドコーヒー7百円。季節のフレッシュジュース千円、抹茶四季の和菓子千円。場所は阪急三宮駅東口山側白蘭ビル3F

■神戸市中央区北長狭通1丁目2
16阪急三宮駅東口山側(白蘭ビル)
3F PM2/11月無休
営業 331-5141



★K O B E
デビュースポット
レストハウス
「居留地127番館」

異国情緒あふれる神戸の新しいデートスポット?!

会社帰りに、そして街に遊びに出たついでに、ふらりと寄りたくなる、神戸市役所隣の東遊園地。美しく並んだ木々、数々の彫刻、高くそびえたミニチュメントを見ながら南へ下ると、レンガ造りの洋館が現れる。7月8日にいよいよオープンしたレストハウス居留地127番館。何ができるのかと心待ちにしていた人は多いだろう。

昭和前期、同遊園地近くにあったスポーツクラブ「神戸レガッタ



右よりコレイア料理長、テラスレストラン柴田通雄料理長フェレイラ料理長、今福マネージャー

が、6月15日(土)から23日(日)まで、1Fの「テラスレストラン」で開催。プラニシエス地方の郷土料理は、「ボザード・ドス・ロイオス」と「ボザード・デ・サンタ・イザベル」の両総料理長を招いての特別メニュー。南部のプラニシエス地方の香り高い味わいを、フアードの流れる中で楽しむという嬉しい企画。魚貝料理はマイルドな味でミナト神戸にぴったりだ。

■中央区波止場町2-1
電話 333-0111



★シェフの厳しい目で選りすぐられた最高の神戸牛ステーキの「モーリヤ」

生田筋沿い東急ハンズの南側。「モーリヤ」は、老舗の森谷精肉店の2階にある。常にお客様に満足してもらえぬ神戸牛を用意するために、肉の選別には人一倍のこだわりを見せるシェフの平山さん。肉は焼く前に生そのままを見せてくれ、焼き方も好みに合わせて相談できる。調味料は赤穂の天塩または、からし醤油であつさり。素材の良さを追究するこの店ならではの味つくだ。

また、ひそかな人気

が自慢の冷菜は、フランス料理の調理法が生かされたオリジナリティー溢れるもの。ステーキは苦手という方には、ロシア語で「海」を意味するモーリヤらしく、アワビや車エビなど新鮮なシーフードも揃っている。

人気は、ヘレスステーキ(180g)、ロースステーキ(200g)セット各9千5百円。本格派ステーキグラスアルファを求める自称グルメにオススメです。

■神戸市中央区下山手通2-1-17
AM11半~PM9半
(オーダーストップ)
電話 391-4604 無休

・アンド・アスレティッククラブ」を再現し、又当時の地番をそのまま名称に使っているところなど、さすが神戸居留地。神戸の老舗オリエンタルホテルのなせる技だ。

ランチタイムは11時から15時まで。窓から見える公園の木々は季節を写し出してくれ、疲れた頭を和ませてくれる。日替りランチ800円は安い。

■神戸市中央区加納町6-4-1
AM11~PM9
オーダーストップ9時半
電話 333-1100 無休

ポケット ジャーナル



神戸・バルセロナ

姉妹都市提携に仮調印

91年7月15日、午後8時
すぎ(日本時間) 7月16日
午前3時すぎ) バルセロナ



バルセロナ市内

のアルベニス宮殿において姉妹都市提携の前段階として、神戸とバルセロナの両市長が「意向確認書」に署名した。正式調印については、まだ未定だが、88年以後、進められてきたこの協議は、実現への大きな一歩を踏み出した。

バルセロナ市は地中海に

面したスペイン北東部の都市。人口は約170万人で、港湾と結びついた鉄鋼、造船、運輸資材等が発展、自動車もフィアット、ルノーなど外国資本の生産拠点となっている。88年に万国博を開催するなど、コンベンション都市としても発展、92年はバルセロナ・オリンピックが開催される。

また、ピカソ、ミロ、ガウディら多くの芸術家を輩出し、市内に630の文化、科学施設、55の美術館、300以上の図書館を有し、スペインの文化、科学活動の中心地のひとつでもある。

当面の交流は、7月13日にバルセロナ市を出航した復元された「サンタ・マリア号」の受け入れ(92年春)とアーバンリゾートフェアへの参加招請(93年夏)。

▼神戸市長杯バイリンガルスピーチコンテスト開催
神戸YMCAクロスカルチュラルセンターの主催で第12回神戸市長杯バイリンガルスピーチコンテストが開催される。

今年のテーマは「新しい

世界像を求めてー共生ー」

●応募方法は、申込書(YMCAに請求)及び日本語と英語を合わせて10分間のスピーチを録音したカセットテープと英文か日本語どちらかの原稿(英文はタイプすること)を10月25日必着で神戸YMCAクロスカルチュラルセンター(〒650神戸市中央区加納町2-1-15)まで郵送すること。この原稿とテープをもとに約10名の決勝出場者を選出し、11月24日に決勝大会を行なう。特賞は、サンフランシスコ・大阪往復切符など豪華。

詳しい問い合わせ先は、神戸YMCAクロスカルチュラルセンター
☎078-241-8801

多文化化する社会の中で、ひとりひとりの生き方が問われる時代。テーマである「共生」の意味は大きい。



昨年の受賞者

★誕生日ありがとう運動

車椅子で街に出れば!!



日本では交通事故により毎週三百九十人もの人が車椅子に乗るようになるというわれています。それに脳卒中などで半身不随になる方もおられますから、車椅子の使用者は相当居られるはずですが、日本の社会はどうして車椅子に意地悪なんでしょう。駅にはめったにエレベーターがない。バスにも乗れない。だれも自由にどこへでもとは到底いかない。車いすに優しい社会にならないのは老後は惨たんだものになるだろうといわれています。

チャーナリストの大熊さんが自分も右足をギブスで固定して車椅子に乗り、スウェーデンに行く障害者のグループに同行されました。まず自宅から最寄りの私鉄の駅に行ったらエレベーターがなく、駅員に頼み五十三段の階段を車椅子ごと人を運ぶといわれ、その重労働に恐縮して断念、タクシーで東京駅に行きました。そこ

の車椅子の受付に行くところと新幹線専用といわれ、大汗をかいて成田エクスプレスへ行くエレベーターで改札口のあるフロアに降り、改札を通過して別のエレベーターで地下四階へ。さらに別ののりこ乗換えて地下五階のホームへたどり着きました。おまけに成田のホテルから空港へは人間とバスは別々に乗せなければなりませんでした。なんとかならないでしょうか。(K)

誕生日ありがとう運動本部
651神戸市中央区御幸通八十一六
神戸国際会館1階郵便局の隣
☎078-313-1114

▼今、関西の学生が熱い

湾岸戦争の被災地に救援物資を送ろうと、7月3日、ポर्टアイランドのワールド記念ホールでチャリティイベント「LOVE&PEACE」(主催ACC関西、LOTUS・CLUB)が開催された。

このイベントは、湾岸戦争を契機として改めて平和の大切さを考え直そうと、関西の大学生が企画したもので、会場には5千人近い若者が集まった。

参議院議員・アントニオ猪木氏を迎えてのバトルト



バトルト・キング

ークショー、杉本彩さんのコンサート、天宮志狼氏のメッセージダンスパーティーなど潑刺とした内容で会場は盛り上がった。

イベント入場料の一部とこの日集められた募金はユニセフに寄付される。

▼アジアの文化について考えてみよう

アジアの文化について考える場としての兵庫文化サロン(主催 淡神文化財協会、兵庫文化事業団)が、



エプロン姿の奥村講師

第1回目・6月25日・アジアの食文化、に続いて、北上ホテル・白雲の間で開かれた。

第2回目のテーマは「アジアの麺」。講師は奥村彪生神戸山手女子短期大学教授。小麦粉を使った麺の作り方の実演やスライド撮影などわかりやすい麺の歴史と体系についての講義。

意見交換の場では、ビールやジュースが出るなど、終始くつろいだ雰囲気包まれていた。

今後の日程は次のとおり
●8/19・うつわと食文化 ●9/17・ザノスパイス ●10/21・お米の話し 参加料・1回千円 申し込み先 078-333-1455

★ふれあいの心ひとつに

兵庫のまつり「ふれあいの祭典'91」が、今年も八月から十一月迄、兵庫県全域で開催される。

祭典の4つのテーマは、

「文化」「スポーツ」「健康」「福祉」。神戸のイベントは熱気球フライトで五月の神戸まつりで前宣伝。全県の総合イベントの「ふれあいフェスティバル」(10/16日)は、県立文化体育館と神戸市立蓮池小学校で開かれ、閉会式(12/7土)は兵庫県の公館で祭典の総まとめと表彰が行われ、来年の祭典を盛り上げる。神戸でのプログラムは、7/31

8/5 兵庫県身体障害者作品展(兵庫県民会館) 10/6(日)洋舞フェスティバル(神戸国際会館) クラシックとモダン 10/10(祝)音楽とダンスの祭典(アシックスアトリウム) 社交ダンス 10/25(金)28(月)全国手工芸コンクール(兵庫県民会館) 10/31(木)11/5(火)兵庫県いけばな展(大丸神戸店) 11/17(日)日本舞踊の祭典(神戸国際会館)



PRポスター

11/17(日)大茶会(公館生田神社会館) 11/18(月)デパートホール 11/21(木)24(日)第2回兵庫ふれあいの祭典(兵庫県民会館) 術展(兵庫県民会館) お問合せ/県芸術文化課 078(362)3170

図書ガイド



英会話でニューヨーク物語
大前 前田 邦子
学院・監修

将来はニューヨークで仕事をしたいと考えている、お洒落とトレンドが大好きな主人公、小泉花子とニューヨークのガイドマニアが一緒に旅した本。
今まで英会話習得に手を焼いていた人、今度こそ上達にサクセス。(発行・虫出版、発売・主婦と生活社、一・二〇〇円)



老後のわかれ道
中島 幾
中島 幾

日本は、今、かつてない高齢化社会を迎えている。また、そういつた社会的現象とは別に、「老い」の問題は各々の中にある。この本には、その問題に直面した著者自身が、考え、調査し、選択した道筋が描かれている。そして、著者の老後の指針が、「老人ホーム」等、数々の具体例をもとに、示されている。(栄光出版社刊、九〇〇円)



推名三管見
田 新

姫路出身の推名三管見に関する本が出ている。著者・田新新さんは尼崎に住む、第1回神戸文学賞受賞者。
1954年に推名に出会い、以来、傾倒。文通体験を初め、30年以上もこだわり続けてきた彼の思いが推名の経歴、作品を軸に凝縮されている。(神文書院刊、二〇〇〇円)

★生田神社で亀井一成さん
熱の込めった講演



講演風景

7月4日生田神社で行われた兵庫県神道青年会例会で、王子動物園の亀井一成さんが講演をされた。

兵庫県下の青年宮司さん達約100名を前に、「生命の尊さ、親の偉大さは動物も人間も共通のもの」と熱っぽく語り、聴く人は身を乗り出して聞き入っていた。

▼中国留学生友誼交流懇親会開かれる

神戸地区中国留学生聯誼会主催による友誼交流懇親会が、7月6日、神戸華僑会館で開催された。

神戸地区中国留学生聯誼会も、今年で7年目を迎えた。結成当初は30名だった神戸地区の中国人留学生も今では400人を数えるまでになった。

今回催された友誼交流懇親会は、中国留学生の交流と関係者に対する感謝の意を込めたもの。

この開催にあたっては、洪再生中国留学生聯誼会会長も大忙し。連絡先になっ

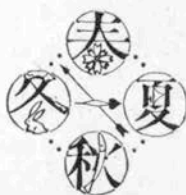
ている、彼の住む神戸留学生会館には留守番電話を構えて、連絡は夜中までかかったという。

約100名の参加者を集め、また大阪、京都からも留学生を迎えて、交流の輪はまたひとつ広がった。



懇親会風景

計時花



文化の種を生かす

神戸は歴史がない、などよく言われる。そんなことはない。神戸にも悠長の歴史はある。しかし残念ながら、戦災で焼失したこともあって、歴史物語は神戸の中でその面影をとどめていない。

最近、なかなかの人氣をあつめている「北野町界隈」は、神戸開港の明治維新の歴史を背景に物語りのよすがになっていて、芥川賞作家の新井満氏の指摘によれば、「セピア色の写真のようなノスタルジイの魅力ということになる。

近く還都千二百年を迎える京都は街そのものが日本の歴史であり、日本文化の種子が息づいている。勿論、焼けていないから総てが大事に保存されている。

神戸も街の歴史や物語りに出てくる文化の種を上手に生かして保存したり生かすことだ。

例えば、謡曲に「松風」という曲がある能の世界では熊野、松風に米の飯、といわれる程の名曲。松風、村雨姉妹が主人公の曲である。須磨には松風町、村雨町もある。そして村雨堂という小さな祠があるが、その扱いはお粗末の限り、こんな有力な文化の種こそ大切に生かす工夫がほしい。

△YV

★ KOBE POST

★8月3日(土)午後3時より、三宮東サンバル8階の、中華料理「天坊」で、作家で詩人の足立善一さんの「夕暮れ思」(世話人代表/杉山平一)が、6度目を迎えた。

今回は、大谷晃一さんの講座が色を添えた。「夕暮れ思」実行委員会/神戸市中央区雲井通5丁目3/1サンバル3Fジャンク堂書店内(078)252・0777
★画家の元永定正さんの「作品集 元永定正1946-1990」が博進堂から出版された。サイズ:T200×Y200ミリ・ページ数/22ページ。作家自らの執筆原稿30ページ、図版約30点、知人友人が語る元永定正10ページ¥25、000
★7月13日、大阪マハラジャに於いて出版記念パーティが開かれた。ルフトハンザドイツ航空会社の西日本地区支配人に、ヘルゲ・スタフォンハーゲン氏が着任。

★兵庫県日韓親善協会(上田将雄会長) 費078(37)30100では、兄弟姉妹の関係にある韓日親善協会ソウル特別市聯合会が、創立10周年を迎え、10月21日にソウル市内において記念パーティが開催される。旅行団は、10/19・10/22の4日間の日程で費用は¥105,000(一人)。申込先は、(KK)アミューザ神戸支店 費078(321)3991へ

★画家の杉浦祐二と史子夫人(ピスク・ドルとガラス作家)が、転居。〒665宝塚市川見が丘1ノ15 費0798(52)1569 苦菜園のアトリエと工房はそのまま〒660西宮市南越木岩町8-13 阪急苦菜園駅前苦菜園第一ビル2F 風川洋画研究所(0798)71-5877 ビスク・ドル工房(0798)72-9316

★服飾ミロー(西條鈴男)が移転。〒650中央区加納町3丁目14-8 費078(221)3205

K.F.S. NEWS 155

熱気に満ちたパネルディスカッション

6月21日（金）中小企業会館においてKFS会員によるパネルディスカッションが行なわれた。パネラーは木村さん、松田さん、是永さん、植田さん。まずはそれぞれ4人の仕事の概要から。

植田さん「私は森真珠の2Fのショールームで販売をしています。昨年は毎日TVで4月～9月まで花真珠が放送されましたが、番組で使われた真珠はすべて森真珠のものです。」

木村さん「私は紳士服の裏地を販売しています。オーダー専門ですが、湾岸戦争、バブル経済の崩壊で高額な紳士服の注文の着数がへりました。ですから最近はかなり厳しい状況です。特にオーダーは職人さんがへってきていますから。しかし、裏地やボタンを換えて下さいというお客様もふえています。」

松田さん「洋裁を教えて20年になります。トアロードでお店をもったこともありましたが。センタープラザで洋裁を教え、今は阪神御影でオーダーをしています。これからは年配の方にもおしゃれを楽しんで頂きたいですね。」

是永さん「美しく正しい姿勢をつくら

なければ健康ではありません。昭和41年から、健康体操教室をはじめ、今はハイエイジクラスの為のリズム体操教室をしています。主婦が着物を着たまま手軽に台所ででもできる体操を始めたのが最初です。」

植田さん「これからは、ニーズからウオントにきりかえないとダメですね。パールのネックレスは生活必需品になっています。今、デザイナーにも力を入れています。というのはパールが冠婚葬祭のみでなく、例えばジーンズにチョーカーのネックレスもできる、ちょっとスカーフを巻くだけでカジュアルブローチをネックレスに使うこともできるわけです。」

木村さん「裏地では、一時流行った、ワンポイント的なものがありますがほとんどは無地です。表地の色とあわせて濃淡、グリーン、茶、などが中心です。外国人は裏地はすべればよいという感覚ですが、日本人は裏地に関心をもっています。主婦などが特に年々流行に敏感で、同じグレイでも、赤味のもの、青味のものとおっしゃいますね。」

松田さん「先程も申しあげたように、

年配の方のおしゃれですが、年をとったから、赤やピンクがダメというのではなく、年をとったからこそ、着てほしいですね。男性の方はどうですか。」
荒津さん「最近では男性も色彩感覚がかわってきました。明るいい色を着るようになりました。ゴルフウェアなどは特にそうですね。健康やおしゃれに気をつけ、仕事をし、楽しく年をとうろうという風に。我々の年代がキープポイントです。もっとおしゃれをして下さいと話をロータリーですると、次の週からはポケットチーフをしてこられる方もいます。話の効果があって嬉しいですね。」

田中会長「テレビでも、藤本義一が頭が真白のまま出てきてから、染める人が少なくなりました。もとの流れは大きいです。洋服も同じです。」と約2時間半の熱っぽいフリートーキング。



るぼるたーじゅ神戸

とうし

やかた

兜子の館

文・有井 基

△フリーライター▽

カメラ・池田 年夫



林の坂道に、ひっそりと静まり、それでいておしゃレな喫茶店がある。名づけて「ギャラリー＆珈琲サロン、兜子館」。十年前の早春、ふらりと世を去った俳人・赤尾兜子の妻・恵以さんが、二年半前に居宅を改装して開いたサロンである。

神戸市東灘区御影山手一丁目一三ノ四、といっても分かりにくからう。阪急「御影」駅の山側を

神戸方向へ、線路沿いの坂道を上りつめ、右に折れて約五〇メートルの左手だ。御影北小学校の西門前に当たる。板張りの白い洋館といった印象のつくりは、内外装ともに恵以さんのデザインだという。

道に面して、手書きの案内書が、雨に濡れないようビニールに包んでさげである。同人・会員三百人を数える俳誌『渦』の発行所で、恵以さんが夫の遺志を継ぐ発行人なのだから、俳句教室や句会案内は当然としても、書道教室、英語教室、

ピアノ教室、そして、占いの会なんてのもある。タロット占いや水晶占いなんてするタチじゃないから「四柱推命ですか」と聞いたら

「ええ、先生につきましてねえ。あれは統計ですから当たる確率も高いんです。この上に短大があって、女の子が

この兜子館をみなさんが好きなように使って下されば満足です、と話す恵以さん。



相談に来てくれるんですよ。」

まあ、この人なら、どんな相談が来ようと、本音で答えを出すだろう。

しゃべっているところへ、この春に出版された『赤尾兜子の世界』の編著者・和田悟朗さん、『渦』の編集を担当する小泉八重子さんが、にこやかに訪れた。先に来ていた斎藤芳子さん、大盛和美さんを含めて、仲の良い兄妹が集まったような雰囲気だ。同行した本誌「神戸っ子」編集長の小泉美喜子さんも「いいわねえ」を連発。旧知の恵以さんと話し込む。思い出をつなぎ合わせて連珠を組むように。

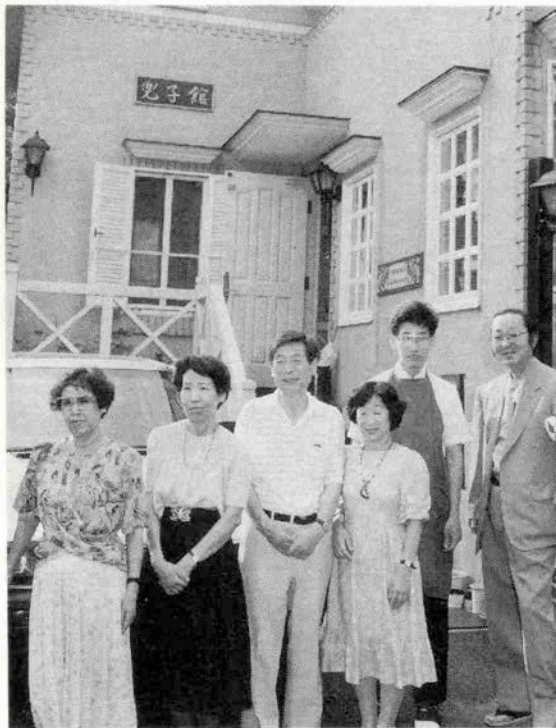
コーヒーが運ばれてきた。味も香りも申し分ない。長男の徳也さんが心をこめて造って下さった絶品である。

「この人はホテル修業に出ていたのですが、どうしても自分でものを仕上げるほうに性^{しょう}が合っているのです、それもあったから、ここ（兜子館）を開いたんです」

恵以さんの母ごころは、だれよりも一粒ダネの徳也さんが知っている。限りなく父の面影を自ら帯びると同時に、父母と異なる道で、自分を生かすことだろう。

そうしたうちにも、お客さんがドアの鈴を鳴らして入ってくる。「コピー おねがいします」「コピー おねがいします」。恵以さんがコピー機を操

シャレタ外観の前で…。



作し、徳也さんがコーヒーをたてる。客が途絶えたところで、恵以さんに一曲の演奏を所望した。コピーサロンのド真ん中に、デーンと据えられている黒いグラランドピアノは「クラシックのカラオケ」、あるいは音楽サロンの太道具だ。これが実際には、どんな効果があるのか。

恵以さんは、おもむろに座って、ピアノを弾いた。二十歳の時からなじんだキーが、コンピュータによるオートマティック演奏のように踊った。曲はタカラヅカの「すみれの花咲くころ」。自分をひけらかさず、人に失望を与えない、絶妙の心くばりである。

「ホント、ここは、クラシックのカラオケでも、ちょっとした音楽発表のショーでも、美術作家の展示でも、好きなように使って下さってこそ、うれしいのです」

これが、よそ行きでなく、きわめて当たり前に、明るく言えるところに、兜子館の、というより、恵以さんのグラウンドがある。

この日は、松花弁当を楽しむ会だった。フランス料理を楽しむ会と同様、五人から二十人まで予約があれば、格安で本物が楽しめるという。ワイン、オードブル、松花弁当、果物、アイスクリーム、コーヒーと続く中で、和田さんたちと話はずんだ。ただ、私の発言にうる覚えがあったので、帰宅後、たしかめたのだが、兜子は、私ごとき外野席のファンにまで影響を与えている。

私が初めて出会ったのは昭和三十三年秋、三宮のたこ焼店「蛸壺」だった。連れと飲んでいると、い



父と同じく、ものをつくるということにこだわる徳也さん（写真左）とピアノを演奏して見せてくれる恵以さん。（右）



きなり絡んでこられて口論になった。最終は昭和五十五年秋、これもいきなり会社へ電話があつて、三宮のスタンドへ来んか、というお誘いだった。もうロレッツが回っていなかったし、一週間後に、この『神戸っ子』のグルメ座談会でお会い出来るから、とお断りする

と、
「なあ、古典やっとかんやで。君は、やりかけたら、のめり込むほうが、近代文学より（古典のほうが）よっぽど深いきかいにな。…そんなら、また会おう」

どこで、どう見て下さっていたのか、日ごろ全くつきあいのない先輩の言葉を、私は神戸市消防局機関誌「雪」（一九八二・四）に書きとめている。電話以後も会っていない。何しろ、初対面でなく、り合い寸前まで行った相手が当時「前衛俳句の旗手」といわれた人だと知った時、おそれ多いことを…と恐縮した後遺症が尾を引いていたのだろう。

しかし、兜子からの電話は、昭和五十五年夏に出版された恵以さんの『ひとすじの光の中に』を、私が三カ所で紹介したことに對する心づかいだったのだろう。たまたま、グルメ座談会の出席メンバ



自由で気ままな空間にはいつも笑顔が絶えない。

ーを見て、ひとこと言っておこうと思われたのではなかったか。恵以さんの、右の本は乳頭腺ガンで入院、手術から復帰までを克明に記録した闘病記だった。私は、自分の生と死を凝視する訓練は熟達の俳人なればこそだと書いた。この人なら、自分の棺を打つ釘の音を匂にするだろう、とも。それから十年余。恵以さんが生死の淵をさまよった時、次々と手をさしのべてくれた仲間たちが、いまも、目の前にいる。あの時いつべん死んだ恵以さんにとって、仲間たちが気ままに集い、

自由に埋めてくれる小さな空間こそが、自分の世界なのだ。

ワインも、ほどのいい温度で、料理とも合う。ふだん貸ギャラリーで好きな人が、好きなように作品（約二十点）をかける壁面も、この日は、兜子ゆかりの作品が、さりげなく、かけられていた。コーヒースロンのわきに、六畳ぐらいのスペースがあり、松花堂を楽しむ会も、そのテーブルをはさんで行われたのだが、正面に、兜子の色紙

音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢 兜

など、作品や在りし日の写真が掲げられている。それらからはうかがえないが、兜子は、いい店うまい店の食べ歩きガイドを共著に持つグルメである。『渦』を継承した恵以さんは、徳也さんと共に、その道を追う。はからずも夫の遺志を受けつぐように。

部屋には「徳也さん、頑張ってね」とサインをした宝塚歌劇OB上條あきらさんの大きなブロマイドも目につく。恵以さんはタカラヅカのオールドファン。その上、星組のトップ日向薫が、いとこの姪に当たるので、そのファンたちの「アジト」になっているとか。

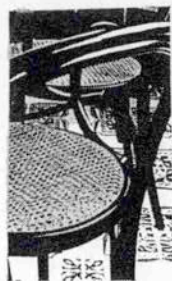
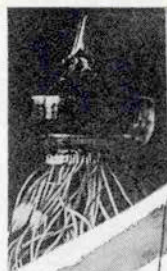
いわば何でもありの人間オモチャ箱。はたして何が飛び出すやら。兜子館からの発信は、理屈抜きだからおもしろく、打算抜きだから減法たのしい。



連載小説／最終回／

星の光
月の位置

大迫 智志郎



カット／田中一好

「とてもそうは……」

「そうですか？ 背の高さに驚かれるのと、年上に見られるのは、もう慣れっこになってますが」

「いや、わたしも昔にしては大男だったんで、背の高さではいつも驚かれたのですが。しかし、十六とは」

「どうして年上に見られたのでしょうか？」

「そうですね……。きっと目線ですよ」

「目線、ですか？」

「ええ、目の動かし方というか、眼ざしの運びですな」

「はあ」

「自分では分かりませんか」

「ええ、全然」

「目線の移し方が大人びて見える。思春期のおきやんな女の子にそんな子が時どきいますからね」

「思いもしない指摘だった。視線が年齢をあらわすことがあるとは考えたこともなかった。」

「あの絵の人は？」

「彼女は、美藍さんというんですよ」

「ミア？」

「ええ。美しく、染め物の藍」

「へえ」

「あの子はね、半分北欧の血が混じってるんですよ。たまたまバスで向かいあわせに座りましてね。頼んで、モデルになってもらったんです」

「ここですか？」

「そう。お父さんが放送関係の研修で滞在するので、母方の里であるこの土地へ、向こうの学校を休学してやってきたといっていましたね」

「いつ、それはいつのことなんですか？」

「老人は遠い目をした。」

「もう、十五年ぐらい前になりますか」

「ぼくは体の力が抜けたような気がした。」

「……そんなに」

「ぼくの言葉に老人はゆっくりうなずいた。」

「では、今どこに？」

「さあ。知り合ってすぐ、父親の都合でここを離れてしまったから」

「老人が口にした少女の行き先は、ぼくの住む街とはまた違う都会だった。」

「きれいな言葉をはなす子でしたよ」

「きれいな？」

「そう。よどみのない、輪郭のはっきりした」

「その少女と話してみたかったとぼくは感じていた。現実の彼女とぼくの接点は見つかりそうにもない。」

「お会いしてみたいですね。その、美藍さんと」

「老人はそっと笑ってうなずいた。」

「……でも、あの少女はもうどこにもいませんよ」

「そうなのかもしれませんね」

「白い壁にとどく光が赤みを帯びてきている。」

「絵のなかに少女を閉じこめたわけですね」

「すると、老人は首をふった。」

「いいえ。閉じこめたんじゃない、絵は少女を開放するんですよ。あのとき、あの絵をかくことによって、わたしは少女性を延命させようと企んだのです」

「延命？」

「そう。ある人がある時期だけに持つ特殊な輝きは、その人のなかに放置しても、必ずといっていいほど消滅してしまふ。絵は形の美しさを表現するものですね。少女性は、だからこそ消えずにすむのかもしれない」

「開放する……」

「そうあればいいという話です」

「ぼくは老人の横顔を見た。」

「お年、聞いてもいいですか？」

「年？、はは、多すぎて忘れしました」

「去年他界したぼくの祖父より少し上だろうか。もしかしらば、明治の生まれかもしれない。話していても淀んだところがなく、容貌を除けば不思議なくらいに衰えを感じさせない。」

「海に行かれるんですね」

「はい。見て帰ろうと思います」

「じつは、いつもこの時間に浜を散歩することにしてます。……いっしょにいきますか」

「ぜひ」

ぼくは老人と浜へいくことになった。

高く積まれたテトラポットの間を老人は器用に浜へ降りていく。ふじつぼのついたコンクリートの塊のなかで見え隠れする白い頭を、ぼくはぼんやりと眺めた。

日が暮れようとしていた。

波頭が群青と茜色の間の幽玄な線をひく。

「昔、フィリピンのある島へいったことがありますね」

老人は靴先をもう一方の足で濡れた砂に埋めようとやっきになっている。

「戦争、ですか」

「はあ」

彼は指を三本そろえて鳥が餌をつつくように動かしてみせた。

「通信の役でした」

「通信？」

「無電の係です。わたしは通信の技術をもっていました。年をとってから召集されたこともあって、通信班に回されたんです」

「ずっとフィリピンでいらしたんですか？」

「そう。向こうの無電を聞いて、暗号文を解説したり、発信したり、いわばスパイですよ」

「敵と交戦されました？」

「いや、結局、全面降伏まで一度も米兵の顔を見ずじまいでした。わたしの場合、相手はいつも目に見えなかった」

「ふうん。負けたときは悔しかったですか？」

「べつに。わたしはとくに面倒くさくありませんでした。戦争のいけないところは、わたしにしてみれば、単に放

っておいてくれないところです。わたしは生来、ひと

いのぐさですから」

老人の話しぶりには、鋭い瞬間の記憶をもっているようすは感じられなかった。

「……十六、といってましたね」

ぼくはうなずいた。

「わたしが絵をかきはじめてのがその歳だった」

「……どうして、ですか？」

「さあ。絵をかく、なんて考えてもいなかったことはたしかです。興味は他にたくさんあった。でも、ゴミが掃除機に吸い取られるようなものだったのかも知れません」

波がなめらかにした砂上を、羽をひとつまみほど逆立てた千鳥が急いでいる。風は少しも弱くならず、浜ゆうも千鳥も不機嫌な顔をしているように見えた。

ぼくと老人の間に波の先が流れこんできた。ぼくが一步下がり、ふたりには少しの距離ができた。

老人がぼくを見ている。ぼくは他人に見つめられるのが極端に嫌だったが、不思議とどうでもいいような気がした。

「……高校生、かな？」

風のせいで聞き取れないふりをしようかと思った。彼は黙っている。ふいにぼくは向きなおった。

真っ直ぐに老人の眉間を見すえた。

「ぼくは、登校拒否なんです」

老人の顔に、感情の動きは見られなかった。

「そう。ここへは？」

「叔母のところへ。遊びに来いって、誘ってくれたんです」

「そうでしたか。楽しいですか、ここでは」

「とても。気楽に過ごせます」

「じゃあ、よかった」

風はさらに強まり、波間だけを見ていると自分がとても小さくなったような錯覚をおこす。足の下の砂だけを残して、水が海へ帰っていく。いつか飛ぶような勢いで、ぼくは海面を駆けていく。

「孤立しちゃ、だめですよ」

ぼくは老人を見た。彼は目を細めて前を見ている。

「孤立するのがいちばんいけない」

ぼくは、うなづくことさえ大げさな気がした。

「星の光、月の位置、です」

彼が顔を向けたので、ぼくは目で問いかけた。

「アメリカ海軍の暗号ですよ。無電のね。あの戦争で亡くなってしまうけれど、わたしの上官だった、年下の班長さんがね、教えてくれたんです。わたしが解読した無線のメモをわたすとそれを見て、いい文句じゃないかって、それは全能力を傾注して作戦を遂行せよ、という暗号だった。あまり重要なものじゃなかった。こっちは必死になって解読したのね。グッドラック、ぐらいの意味だった。でも、以来、その言葉はわたしの念仏になった」

「念仏？」

「そう、念仏です。誰でもその人なりに念仏をもっていると思うんですよ。ほら、子供はいつも何かひとりごとをつぶやいているでしょう？あれも、その子にとっての念仏だと思うんです。わたしは、自分に風穴が必要だと感じるとき、星の光、月の位置、と心で繰り返えてきた。どんなときにでも、星の光を知り、月の位置を想像することができれば、いいと思いませんか」

ぼくは彼のいうことが分かりそうな気がした。

「この歳にもなると、放っておくとすぐ孤立してしまう。でも、それではね。わたしが絵をかきだしたのは、今からすれば社会と関わりをもちたかったからなんです。ようやく、それは動機のままでは終わりませんでした。他に誰も知らない記憶を、いっしょに並べられる人はどんないなくなる。いても忘れられるばかりですよ。まあ、忘れられるから人間はやっていけるのでしょうか、これは、時どきたまらないものです」

「そんなものですか」

「さっき、友達がきていたでしょう」

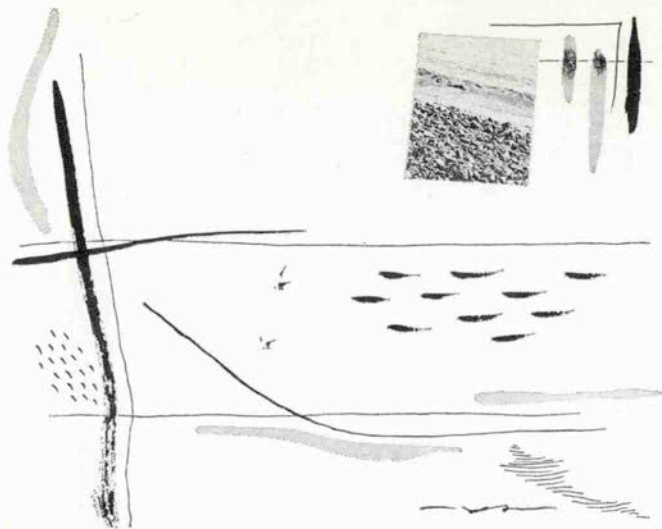
ぼくは帰ろうとする彼の友人の姿を思い出した。

「彼と、今彼の連れあいになっている女性は、わたしの幼なじみなんです。今は空港になっているあたりで、毎日遊んだものです」

老人は涙の先を指した。

「十歳になるまえに、彼は関東へ引っ越していった。わたしは後から、向こうの学校へいったけれど、結局、彼とも、彼女とも歳をとるまで会えなかった。彼女は、彼女はハルちゃんという名前なんだけど、精神の病気でね。家庭的に不遇だったようだけど、ずっとここで暮らしていたらしい。五十年ぶりに、わたしが故郷に帰ってみると、ちょうど彼も七十にして離婚し、こっちにもどってきていて、三人で再会したんだ」

想像もつかない時間の厚さを意識して、ぼくはあいまいな感慨を覚えた。



「しばらくして、ハルちゃんと彼はいっしょに暮らすようになった。ハルちゃんは子供のとき、行動的で、いつもリーダーだった。彼女自身も若いころ一度結婚したことがあったらしいけど、彼は昔からハルちゃんが好きだったみたいだね。じつは、わたしも彼女が好きだった。魅力的な女の子だったんです。快活な母性をわけへだてなくふりまいてくれた……」

ある予感がぼくのなかで起こった。

「よければ、お友達のお名前を」

「舟越です」

すぐ、ビニールハウスのなかの男と、あけっぴろげに笑う女の姿が思いおこされた。

テトラポットの間に黒い潮だまりができている。海水は波となってそこに飛びこんでくるが、行き場を失い潮だまりのなかをふちにそってめぐっている。また波がくる。水は勢いに圧されてあふれだす。古くなった水の一部は穏やかに導かれて海への潮道を下っていった。

老人が仰向いた。

「陸風に、なりましたね」

「きょうは、一日、店をまかしたわよ」

叔母が、飲みすぎたゆうべのぶどう酒のせいで荒れた声を張りあげた。

「ほっほう、どちらまで？」

「ん、ちょっと」

「ぼくに胸囲を計れっての？」

彼女は爪を吹いている。

「きのうは遅かったね。どこいってたの？」

老人に出会ったことは、まだ話していなかった。

「海をね。少し」

「海を？」

「うん」

「見たの？」

「うん、まあ」

「ふむ」

叔母は立ちあがった。

「夕食は自分で作れるわね」

ヒールに指を伸ばしたので、彼女のサーモンピンクのスカートが傾いた三角形のシルエットをえがく。

「誰かといっしょなの？」

叔母はいたずらっぽい目をした。

「あまりいい質問じゃないわね」

そういったかと思うと、ひやりとした彼女の手がぼくの両頬をはさみこんだ。

「ねえ、きょうは出かけるの。親しい人とね。もちろん、いっしょにはいてあげられない。わかるでしょ。誰だっけ自分のことがまず優先。そんなもんよ」

ぼくは笑いがこみあげてきた。

「そりゃね。ぼくでも知ってるよ。星の光、月の位置だよ」

叔母は少し驚いたような目をした。

「何？ それ」

「暗号」

ぼくらは連れだって駐車場へ向かった。隣家の垣から青紫色をしたすだれのような実が幾筋も垂れてきている。砂利を踏みながら路地を抜けると、木枯らしにはためくビニールハウスが見えてきた。

今朝も彼はそこにいた。

ぼくは彼の横顔を注意深く見つめた。叔母の鼻唄が一時、止まる。

「おはようございまあす」

高い彼女の声に、てらいはなかった。

ふいに、彼が顔を上げた。

柔和な目をしている。

風にたたかれるビニールの向こうで、彼の表情が緩んだようにぼくには見えた。